神田山やすらぎ園

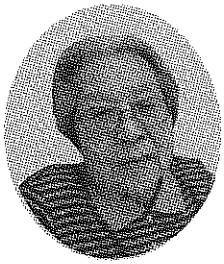
特　別　養　護

神田山やすらぎ園は、市内の北東部神田山丘陵地帯に位置し、眼下には太田川や、川沿いに広がる町並み、周辺には四季を通じて桜並木・深緑・紅葉と心やすまる景観にめぐまれた所にあり、昭和57年（1982年）6月に入園定員100人の特別養護施設として開設された。

所在地：〒732-0086　広島市東区牛田新町一丁目18番2号
（TEL 082-223-1390）
（FAX 082-221-5985）

辛い思い出

越　道　スエノ（八十六歳）



被　爆　地……西天満町（爆心地より一・三km）
当時の急性症状……右足の火傷・打撲
家族の死亡……なし
現在の病状……卵巣癌術後・甲状腺機能低下・緑内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は、母、兄、甥（戦死した兄の子）と一緒に皆実町に住んでおり、大手町にある会社に勤めていました。西天満町に住んでいた友人と一緒にモンペを縫うため、日曜日から友人宅に泊っていました。

八月六日の月曜日、友人と一緒に出勤する途中被爆しました。ものすごい衝撃にとっさにどこかの家に飛び込みました。その家が崩れ、下敷きになり意識を失いました。しばらくして誰かが引きずり出してくれました。足に怪我をしていたため治療をしてくれる所へ連れて行ってもらいましたが、それが何処かわかりませんでした。後にな

って、一緒だった友人も私を助けてくれた人も亡くなったと聞きました。

何日か経ち、自分の家に帰ってみましたが、そこには誰もいませんでした。母と甥は、可部に嫁いだ姉が自分の家に連れ帰っていました。母は、防空壕にいたため無事でした。甥は、屋根が落ち頭に怪我をしていました。私も家が壊れ、住めないので姉の所に身を寄せました。

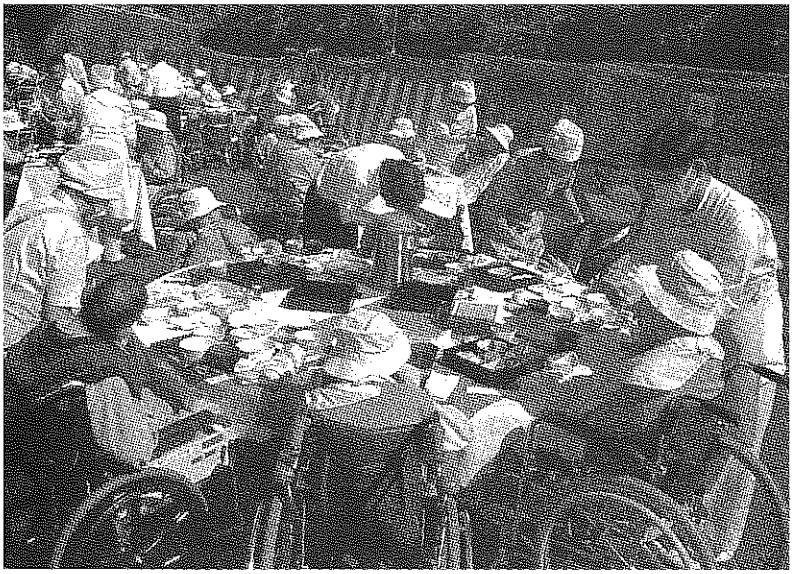
仁保で仕事をしていた兄は、怪我をし、天応から来た消防団の人に助けてもらい、治療してもらっていました。可部の姉が迎えに行きました。私はずっと兄に付添い看病をしました。治療薬もなく、傷口に湧いた蛆虫を割箸で取りました。兄は、何日かして宇品の病院に入院しました。ひどい火傷のため記憶も曖昧になり、病院を抜出し、行方不明となりました。現在も生死不明のままです。

母から、「嫁に行けなくなるので被爆したことを他人に言ってはいけない」と言われ、被爆者健康手帳をもらわずにいましたが、知人に勧められ昭和三十七年に受けました。

被爆のせいか身体が弱く、結婚後も流産や早産が続きました。最初の女の子は七か月の早産で生まれ、生後十日目に亡くなりました。昭和二十五年、漸く男の子に恵まれましたが、身体が弱く生後六か月で脱腸の手術をしました。私は、三十二歳の時、

卵巣癌で片方の卵巣を切除し、三十八歳の時には夫を癌で亡くしました。母は、六十四歳の時、子宮癌で死亡しました。

被爆後ずっと家族を養うため他人には言えない苦労が続きました。戦争は人の運命を変えてしまいます。二度と私のように辛い思いをすることがないようにと願っております。



屋外食事会

前向きに生きる

佐々木　喜代美（八十九歳）

被　爆　地……下柳町（爆心地より一・五km）
当時の急性症状……火傷
家族の死亡……父
現在の病状……高血圧症・心不全・貧血

被爆時の状況及びその後の生活

私は、下柳町（現在の銀山町）で活字製造工場を経営していた父と母と三人で生活していました。工場は自宅前にありました。四人兄弟でしたが、兄はフィリピンに出征し、姉は結婚しており、弟は京都の大学に行っていました。

八月六日の朝、父は前夜、基町で将校さんたちとの会合が夜遅くまでありましたのでまだ寝ており、母が代わりに工場の手伝いに行っておりました。

私は、朝の掃除をしていました。光が目に入り振り向くと、父の寝ていたところが潰れていました。私は右足を火傷していました。母は無傷でした。父のことが気にな

りながら、母と二人で牛田まで歩いて逃げました。不思議なことに悲惨な状況が私の目には、何ひとつ入っていませんでした。

翌日、自宅に帰りましたが家は全て焼けていました。父の骨を拾いましたが、辛すぎて涙も出ませんでした。私は火傷をしていた右足が悪化し、歩けなくなりましたが、衛生兵さんに治療を受けることができました。

出征していた兄が帰った時「何故父を助けられなかった・・」と言われ、悔やまれましたが、どうしようもありませんでした。

その後は、可部で小間物屋をしていた伯母のところで何不自由なく生活できました。半年後に結婚し、写真屋をしている主人の手伝いをしながら子供二人に恵まれ、一所懸命生活してきました。

原爆で生活が一変しましたが、思い出しても仕方ないこと、前向きに生きるしかないと思ってきました。今、私は原爆養護ホームで穏やかに過ごしています。この平和が続くように願っています。

果たせなかった約束

佐藤　一江（八十二歳）

被　爆　地……金屋町（爆心地より一・六km）
当時の急性症状……脱毛・発熱・下痢
家族の死亡……なし
現在の病状……乳癌術後・胃潰瘍・膝関節痛
・右肩骨折後の手の痺れ

被爆時の状況及びその後の生活

私は、両親と三人で金屋町に住んでいました。女学校卒業後、友達のお父さんの世話で挺身隊に行き、広島陸軍兵器補給廠に勤めました。

八月六日の朝、両親は家財道具を疎開させるため、家の前で荷造りをしていました。私は数日残業が続いていたので、上役から「明日はゆっくりしておいで」と言われ、荷造りを手伝っていました。

一段落したので勤めに出ようと、家の中で着替えをしている時、「ピカッ」と光っ

たと同時に天井と壁が落ちました。我が家は潰れませんでしたが、職場のことが気になりました。道路には潰れた家などが散乱し、この下に人がいるかも知れないと思いながら職場へ急ぎました。

兵器廠の倉庫には、もう火傷をした人が来ていて「水をください。水を・・」と訴えられました。軍医さんが「水を飲ましたらいけんよ」と言われるので、そのことを伝えるのが辛かったです。倉庫の中に火傷の人たちを収容し、介護の手伝いをしました。火傷がひどく体液が滲み出たり、焼けた臭いもひどく、自分の着衣が濡れるほどでした。トイレの手伝いをした時は、下着と一緒に皮膚が剥けました。

次の日の朝には、亡くなっている人も多く、意識のある人には名前を尋ね、エブ（荷札）に氏名を記載し、小指に巻きつけました。

終戦までは、怪我人や死人の世話をするのが忙しく、自分の体調に異常があったとは思いませんでした。終戦からは、発熱や下痢、食欲減退などがありましたが、薬はなく水で冷やすしか方法がありませんでした。頭に手をやれば髪の毛が抜けてきたりしました。

その後結婚し、昭和二十八年に男児を生みました。産後の肥立ちが悪く、医師から母乳を飲ませないよう言われ、（その理由が被爆によるものだとは後から聞かされま

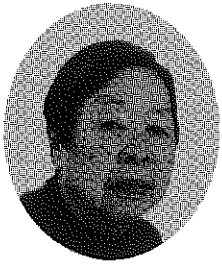
した。）ミルクを飲ませていたら、砒素に汚染されたミルクだったので、息子の健康状態も充分ではありませんでした。（森永砒素ミルク事件）

私は、現在に至るまで血痰（結核ではない）が出たり、胃潰瘍や乳癌、膝関節痛などを患いました。

進徳女学校の生徒さんが建物疎開の手伝いをしていて被爆し、火傷のため兵器廠に運ばれました。その中のイズミさんと云う方から「父親が市役所にいるので連絡を！」と依頼されたのに、連絡できませんでした。したくてもできる状況ではなかったのです。あくる朝行ってみると、イズミさんは既に亡くなられていました。

その後、何度かイズミさんのご家族を調べようと思いましたが、主人の転勤も多く、そのままになってしまいました。そのことが気がかりで現在でも忘れることができません。

平和への祈り



下田春江（七十九歳）

被爆地　楠木町（爆心地より二・〇㎞）
当時の急性症状　脱毛・貧血
家族の死亡　なし
現在の病状　パーキンソン病

被爆時の状況及びその後の生活

私は、中学二年生の時、学徒動員で楠木町の工場で働いておりました。

当日、八時頃に作業を始めようと工場に入り、作業台に向かったとき、突然吹き飛ばされ、瓦礫の下敷きになっておりました。後ろを振り向くと火の手が上がっておりました。やっとのことで瓦礫の下から這い出したことを覚えております。

そして、楠木町から避難場所の古市町方面へ行きました。途中で火傷をした人が「水をください」と言っておりましたが、どうすることもできませんでした。

太田川の中では死体がいっぱい浮かんでおりました。川原ではその死体に石油等を

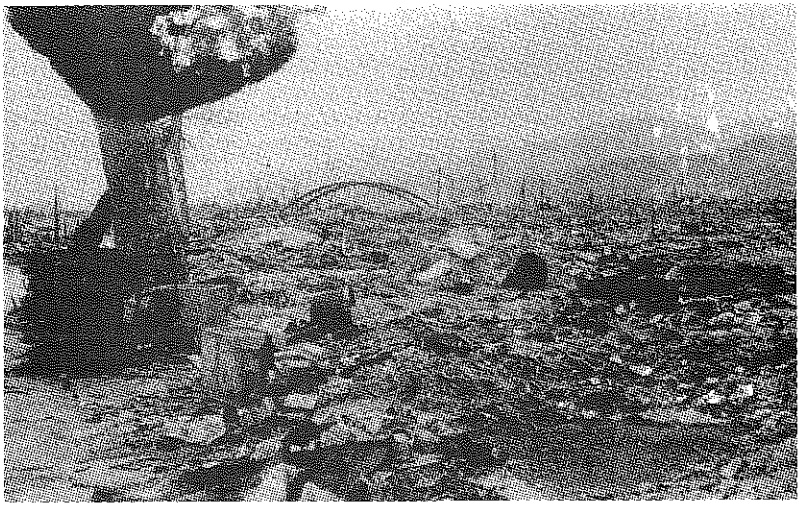
かけて焼いておりました。とても臭かったです

祇園町に着いたのは夕方でした。田んぼの稲の穂に花が咲いていましたが、頭の部分が五センチ位茶色く、又、黒く焦げていました。

三日位経って白島中町の我が家に帰りましたが、全焼しておりました。

十五日頃に終戦の知らせを聞きました。少しずつ焼け跡に人々が帰って来て、家が建ち始めました。七十年くらい、広島には木も草も生えないということでしたのに、市民の懸命の努力により早く立ち直ったと思います。

平成二十一年八月、やすらぎ園に入園が決まりました。父は私が七歳のと



全焼全壊した楠木町

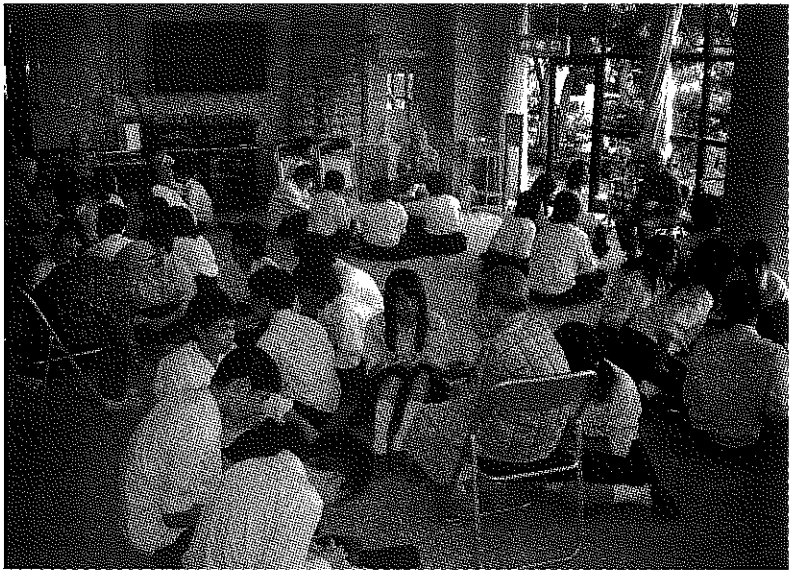
三篠橋西詰（太田川右岸）下流側から南西（横川橋）に向って。写真左は太田川、遠くの山は己斐方面。（尾木正己氏撮影／広島原爆被災撮影者の会提供）

き亡くなりましたが、入園前にその父への報告を兼ね、平和公園に行きました。平和公園は、夏の花が咲き、特に百日紅がきれいでした。

そこで一句、

「千羽鶴　百日紅にも　かけており」

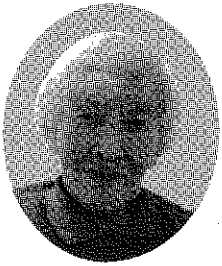
もう戦争はいやです。世界平和を願っております。



学生生徒の平和学習

悲しい思い出

隅田　ハルコ（九十五歳）



被　爆　地……己斐町（爆心地より二・五㎞）
当時の急性症状……怪我（左前額部）
家族の死亡……なし
現在の病状……慢性肺気腫・甲状腺腫

被爆時の状況及びその後の生活

私は、当時父と己斐町に住んでいました。父は国鉄の呉線方面で働き、私も己斐駅（現在の西広島駅）で伝達や報告の仕事をしていました。

八月六日の朝、下りホームで仕事中に原爆を受けました。飛んできたガラスの破片で左前額部を大きく切り、血だらけになりましたが、痛みは感じませんでした。辺りを見ると瓦やガラスが散乱していました。ホームに腰掛け、仕事が始まるまで待っていた横川分区の男の子は、左半身に火傷をしていました。

急いでみんなと八幡さまの横を通り、山の方へ逃げました。逃げる途中、山側の家

が燃えていましたが、誰も消す人などいませんでした。風に吹かれて下の方から上へ、家はどんどん燃えていきました。雨が降り始め、濡れないように絶佳園にある建物の軒先に避難しました。

雨が止んだので山から駅に戻りましたが、仕事のできる状況ではなく、駅から四百メートルの所にある自宅に戻りました。表側のガラスは壊れ、瓦も飛び、堅い床柱にガラスが手裏剣のように突き刺さっていました。刺さっているガラスを根元から折りましたが、床柱には現在もその傷が残っています。

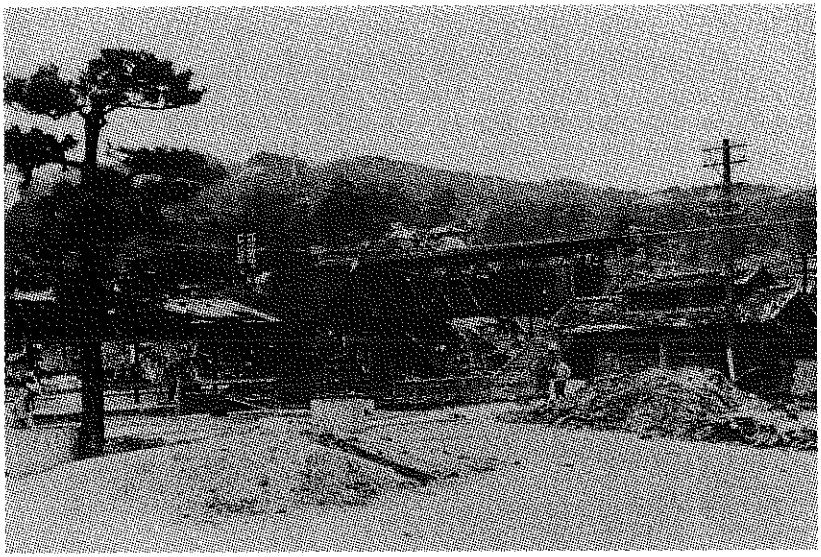
表でガサガサ音がしたので見ると、家の前を通る人が指の先に紙のようなものをぶら下げています。「おじさん、どうして紙をつけているのです？」と尋ねると「これは紙じゃありません。私の皮膚が肩から剥け、爪のところでぶら下がっとるんです」と言われました。地面までぶら下がった皮膚が乾き、パラフィン紙のように透けて見え、擦れて音がしていたのです。その人はそのまま帰っていかれましたが、気の毒でたまりませんでした。

心配していた父は、橋が落ちた広島の町を回り道しながら疲れてやっと帰って来ました。広島の方からぞろぞろと行列を作り、大勢の人が歩いて来ました。あまりの人数に、広島の町には人がいなくなるのではないかと思いました。

避難場所になっている己斐小学校に行くと、講堂は足の踏み場もないくらい傷ついた人でいっぱいでした。若い兵隊さんに額の傷を診てもらおうと頼みましたが「何もないのでどうしようもない」と言われました。廊下に横たわって死んでいる母親の乳を飲んでいる赤ちゃんがいました。かわいそうで、今でも思い出すと涙が出ます。一斗樽にたくさんの水が用意してありました。

「おいしいのう。水がうまいの・・」と言いながら息絶える人を見て、「瀕死の人に水をあげてはいけない」と痛感しました。校庭では溝を掘り、死んだ人を集めては焼いていました。

私は、被爆後より、人に体を触られ



己斐駅　爆心地から約2500m。東方から西方に望む。己斐駅（西広島）は原爆の爆風によって倒潰、上下線をまたぐ陸橋のみ残る。
（川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供）

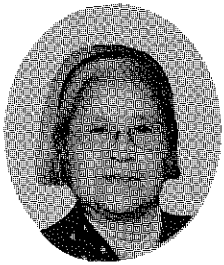
ると体中にピリピリと電気が走り「キャッー」と思わず声が出てしまいます。そして胸がドキドキします。急に近くで声を掛けられても同じように、胸がドキッとしてびっくりしてしまいます。何十年経った現在もそうです。

戦争も原爆も絶対あってはいけません。核兵器の廃絶を強く強く願います。オバマアメリカ大統領の核に対する宣言を聞いて、オバマさんを好きになりました。

盆踊り大会

生き別れになった我が子との再会

瀬川　菊江（九十一歳）



被　爆　地……東観音町（爆心地より一・三km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……父
現在の病状……糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

私は、終戦の半年前から地御前に子供三人を連れて住んでおりました。五日に子供を連れ広島の実家に帰りました。

六日の朝、私は二階で蚊帳を片付けていて飛ばされ、向かいの家の瓦が頭に降ってきました。妹は私の二女を抱いたまま目の下から血を出していました。父は蠅叩きを持ったまま、眼を半開きで死んでいました。母は台所で下敷きになっており、妹と一緒にガラクタを除け引っ張り出しました。長女の祐子は玄関の方にいましたが、自分で出てきて「かあちゃん」と私に抱きついてきました。見れば顔が歪んでいました。

また、長男の泰司がおりませんでした。町中を必死に「泰司やぁ　泰司やぁ」と叫び、探し回りましたが、町中回っても姿が見えず、とうとう諦めました。

地御前に帰り二か月位経って主人が兵隊から戻ってきましたが、ガラスの破片が身体に刺さり傷だらけで、なかなか治らず困りました。息子は死んだものと思って毎日拝んでおりました。その後、市営アパートの抽選が当たり、広島に戻りました。主人も体がよくなり働いておりました。

原爆投下から十五年後、朝日新聞に「この子の親を探そう」という記事が出ており、その中に主人の顔とそっくりの写真がありました。押入れから主人の若い頃の写真を出し、並べてみたらそっくりでした。翌日、写真と新聞を持って新聞社に行き、社員の方と一緒に五日市にある広島市戦災児育成所・童心園を訪ねました。お坊さんから、泰司は十五歳までここで生活し、現在は本人の希望で就職し、社員寮に入っていることを教えてもらいました。五日市の学校の時の写真を出してこられましたが、それは戦後生まれた三女にそっくりでした。

主人と社員寮を探し訪ねて行きました。面会に行く度に少々の菓子や肌着を買って持って行き「アパートに遊びに来るように」と住所を書いて渡しました。

何か月か経ち、泰司が遊びに来ました。姉の祐子は弟が来るので月賦でテレビを買

い、テレビを仲良く見ました。みんなで炬燵を中心に布団を敷き、息子の隣に寝ました。夜明け前、私のお腹が冷たい尿で濡れており、まさかと思いました。息子は、幼い頃小便たれだったのでよく灸をすえていました、一旦は治っていたのだろうに・・・。夫のパンツと下着を黙って枕元に置いてやりました。

翌朝、息子は恥ずかしかったのか、私が朝食の支度をしている間に寮に帰っていました。

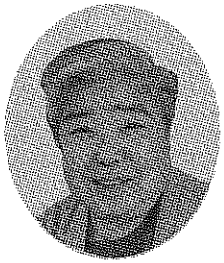
それからしばらくして、息子は家に帰って来ました。いい嫁さんをもらい、孫も二人生まれました。息子は真面目に働いておりましたが心臓病に罹り、嫁の看病の甲斐もなく亡くなりました。その嫁も私が八十歳の時に病気で亡くなりました。

嫁が死んで十年が過ぎました。上の孫はアメリカ人と結婚し、アメリカに住んでいます。妹の方はまだ独身ですが「早く縁があるといいなあー」と願っております。

瀬川家では私が一人になり、今、やすらぎ園にお世話になっています。「人間の命はわからないものだ」とつくづく思います。

母との思い出

林　富代（七十八歳）



被爆地……入市（八月七日・紙屋町）
当時の急性症状……腫れ物（両足）
家族の死亡……母
現在の症状……脳梗塞後遺症

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時、母と一緒に古江にある祖母の家で叔父や叔母たちと暮らしていました。八月六日の早朝、母と広電の古江駅まで行き、母は広島市内に、私は五日市にある女学校へ向かいました。

七時には女学校に到着。友達と教室にいる時「ピカッー」と光を感じ、一斉に窓の方へ走ったと同時に「ドン」と物凄い音がし、机の下に潜り込みました。何が何だか分かりませんでした。教室の窓ガラスが割れ、床はガラスの破片でいっぱいでした。その後、広島は爆弾で大騒ぎになっていると分かり、先生の指示で歩いて家に帰りま

した。

夕方になっても母が帰って来ないので叔母と己斐まで行きましたが、市内の方は火や煙でどうすることもできない状態でした。娘さんを探しに行った近所の人が東練兵場にいると教えてくれました。

翌朝早く、昨日、水主町（現在の加古町）で怪我をした叔父を道案内として大八車に乗せ、祖母と三人で母を捜しに行きました。市内を見渡すと建物は無く、煙があちこちと立ち、地獄のように惨めでした。宇品線の道を広島駅へと向かう途中、比治山方面で止まっている一台の電車に目がいきました。人の顔が見えましたが、眼はえぐれて無く、蛆がもぞもぞ這っており、ぞっとしました。たった一日で蛆がわくとは思いもしませんでした。川の両岸には筏のようなものが見え、祖母が「筏でなく死んだ人が浮かんで流れている」と教えてくれました。

やっと東練兵場に着きましたが、テントが多くたくさんの人で、母がどこにいるのか分かりませんでした。捜しに行った祖母が見つけ「富代、びっくりせんように」と言い、みんなで母のところへ向かいました。死んだ人や横たわっている人を見ながら、「水を下さい」と言う人の中をすり抜け、最後のテントの前で立ち止まったので中を見るが母はいませんでした。

「お母ちゃんは」と尋ねたとき、「富ちゃん」と言ったので振り向くと知らない人が座っていました。顔は黒く腫れあがり、服はぼろぼろ、皮膚はワカメをぶら下げているように垂れ下がっていました。思わず「本当にお母ちゃん」と叫びました。母と分かって嬉しかったけど地獄絵のような姿が辛く嫌でした。

大八車に乗せるにも手を持てば火傷した皮膚が破れて痛がり、乗ってからも車が揺れ痛がりました。少し行っては休み休みの繰り返しで、途中の光景など見る余裕も無かったです。町には何も無く、ただ唸る声と人々を重ねて焼く臭いが私の心に残っています。

帰宅して看病するにも、病院には薬が無く赤煉瓦を削って火傷に塗りました。母は五日後に亡くなりました。あと四日生きていたら戦争が終わったのに残念でした。淋しく悲しかったです。

資料館を時々テレビで見ますが、私は一度も行ったことはありません。あの写真より母の姿がどれほど酷かったか・・・。

これからの世界に、原子爆弾や戦争の無い平和な未来が来ることを念じております。

思い出したくないあの日

湊　恵美子（七十七歳）

被　爆　地……比治山町（爆心地より一・五㎞）
当時の急性症状……怪我（両足）
家族の死亡……なし
現在の病状……狭心症・気管支喘息

被爆時の状況及びその後の生活

平塚町で生まれ、祖母、母、妹と四人家族で住んでいました。

当日八時十五分、霞町の比治山女学校へ勤労奉仕のため行っていました。警報が鳴ったため、校長先生が「奉仕を止めて掃除をせえや」と言われたので、校舎の掃除をして一階と二階の階段の踊り場で休んでいました。

爆音と同時にピカッと光ったので、一階に降りようとしたら、背中に柱や壁が落ちてきました。幸い怪我は無く、一人でグランドに逃げました。

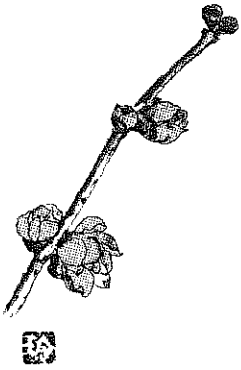
初めは、比治山に弾薬庫があったので、それが爆発したのかと思いました。

逃げる途中、両方の内股が切れて血が出ていたので、自分が持っていた三角巾で縛り、邇保姫神社に少しの間避難しました。神社の裏山から安芸郡府中町まで友達と歩いて帰りました。途中で傷の手当てをしてもらいました。大州のぶどう畑に怪我をした人や火傷をした人がたくさんいました。

原爆が落ちて三日目に、母親が一歳の妹を連れて会いに来てくれました。私は足の怪我がひどく骨が見え、家で治療してもらいましたが、治るまで二年位かかりました。その時、来てくれた妹は高校二年生で原爆症のため亡くなりました。

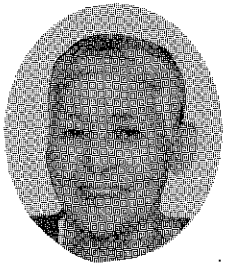
学校卒業後、横山製針工場へ働きに出ました。結婚しましたが、子どもには恵まれなかったので夫と離婚しました。その後、また働きに出て一人で生活していましたが、身体の健康と淋しさもあり入園しました。

原爆にあったものでないとわかりません。もう二度とあんなことを繰り返してほしくないです。



忘れることのできないあの日の記憶

脇本菊子（八十四歳）



被　爆　地……皆実町（爆心地より三・〇㎞）
当時の急性症状……脱毛
家族の死亡……なし
現在の病状……多発性骨髄腫

被爆時の状況及びその後の生活

私は、当時十九歳でした。挺身隊で広電の電車の車掌をしていました。

原爆が落ちたときは、ちょうど電車に乗務しており、急いで座席の下に隠れました。運転手さんは肩の部分にガラスが刺さり、真っ白いワイシャツが血まみれになっていました。電車の外に出てみると人の姿が見当たらなくて、自分のいる御幸橋から広島駅までが一直線に見えたのです。

足元をよく見ると、真っ黒になった人が「水をくれ」と言っているのでした。その人たちに水をあげようとしたら、消防団の人に「水をあげたら死ぬ」と桶を取り上げ

られ、水をあげることができませんでした。

私はたくさんの人が亡くなるのを見ました。近くには、お母さんであろうと思われる女性の死体の近くで、子どもが泣き叫んでいました。私は見ていられませんでした。

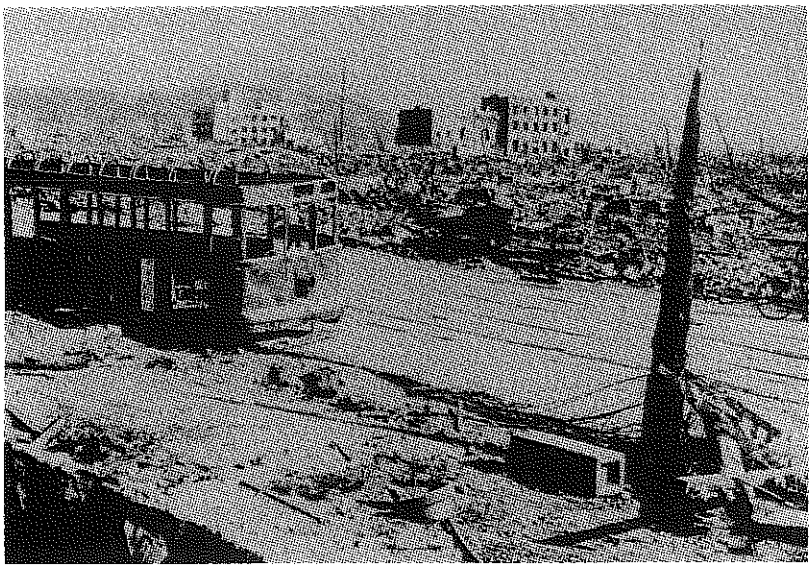
それから私は自分の同僚を探し始めました。比治山の寺まで歩いていき、着いたとき、黒い雨が降り始めました。その雨を手に受け、擦り合わせてみると黒いベトベトした油でした。

翌朝、死体を運ぶ人の姿を見ました。運ばれてきた死体は山のように並べられ、まるでこの世の地獄を見ているようでした。御幸橋の下の川はたくさんの死体であふれていました。その日も、同僚を探しに市内に戻り、歩き回りました。皮が爛れ、男女の区別がつかないほど焼けてしまい、骨まで見えるような多くの死体が積み上げられていました。

原爆投下から三日間が地獄でした。「水をくれ」と言って倒れている人がいたり、馬や牛が立ったまま死んでいたりしました。地面は死体で覆い尽くされていました。

私は結婚の話が出たとき、被爆していることを隠しました。原爆が投下された広島の中でさえ、被爆者は差別されたのです。結婚するときに「被爆者の子どもは障害を持ってしまうから結婚はできない」など、多くの差別を受けました。

この頃の記憶は、毎年八月六日になると嫌でも思い出されます。今まで私は原爆のことを隠しながら生きてきました。思い出すのも辛くて、話すこともしたくないと思っていました。ですが、私のように原爆を経験した人が話さなくては、また同じことが繰り返されてしまいます。これ以上私たちと同じ気持ちになる人が出てはいけないと思います。ですから、私は原爆の経験を人に話しているのです。



全焼全壊した広島電鉄市内電車

紙屋町交差点北側の外堀の上から南東（平田屋町の大林組広島支店など）に向って。手前右端黒い先の尖った棒杭状の物は焼けて折れた電柱の残骸で、先端部は柱基に折れている。（川原四儀氏撮影／広島原爆被災撮影者の会提供）